

# 11 「広益俗説弁」 井沢蟠龍

● 解答 ●

- 問1 ① 問2 ④ 問3 ⑤ 問4 ⑤  
 問5 ② 問6 ③ 問7 ④ 問8 ①  
 問9 ② 問10 ④

確認問題

- ① a ㉠ウ b ㉡イ c ㉢エ d ㉣ア

- ② (1) ㉠iv (2) ㉢iii

- ③ イ ④ ウ

補充問題

- ⑤ ア  
 ⑥ I ㉠鮑寿孫 II ㉡白楽天

## 〈〈〈 解答へのアプローチ 〉〉〉

### ★近世の隨筆

前半に世間で言い伝えられていた話としてある侍の話が記述される。母を殺し、その首を持って逃走した侍。なぜ、侍は母の首を持って逃走したのか。その経緯をめぐる世間の評価を記した後、作者は自らの見解を述べていく。問題文には前半の侍の話だけでなく、後半の作者の見解の中にも二つのエピソードが述べられている。それらの物語の趣旨を正確に読み取りながら理解する力が求められている。

## 本文の構成

### 前半部

#### ■俗説―母を殺した侍の話―

・故郷に残してきた母を迎えるために本国に帰る侍

↓途中、「盗人として木に縛られている罪人」侍の母を見る。

侍 …「どうにかして母を助けたい」↓どうしようもない。

←

母の名誉を守るため、母を殺しその首を持って逃走し埋葬する。

・主君の元に戻った侍は主君に事情を説明する。

侍 …母への不孝を理由に、仕官を辞し出家することを申し出る。

←

主君…機転を利かせて母の名誉を守った。㉠この上ない親孝行者。

・当時、世間の人々も忠義と孝行を兼ね備えた侍であると噂した。

### 後半部

#### ■作者の考察

作者…この侍の行為㉡言葉で言い表せないほど悪い。

(理由1) 宋の鮑寿孫…賊に捕らわれた父を助けるため、自らの命との

引き換えを賊に申し出る。↓賊…哀れみ、二人とも助ける。

(理由2) 白楽天の詩…春秋時代の呉起は母の喪にも臨まなかった。そ

の心は鳥にも劣る。↓母を殺す者を白楽天に見せたならば、梟

と同じだと非難するであろう。

∴ 母を殺したこの侍は大罪人である。

↓事変の時には主君をも殺しかねない人物㉢注意が必要な人物

〔出題大学〕青山学院大学 経済学部(個別学部日程)

問1 空所補充

選択肢の語の文法的説明はそれぞれ次のとおりである。①「ばや」は願望の終助詞、②「べし」は推量の助動詞、③「たり」は完了・存続の助動詞、④「らむ」は現在推量の助動詞、⑤「ざらむ」は打消の助動詞「ず」の未然形「ざら」に推量の助動詞「む」が付いた形。

これらについて、まず、**接続の観点**から考察する。空欄直前の語「たすけ」は力行下二段活用の動詞「たすく」の未然形または連用形である。選択肢のうち、②「べし」と④「らむ」は**終止形に接続する**ので、どちらも×。

次に**前後の内容**から考える。「かの士」が本国に帰る途中に見た者は盗人として木に縛りつけられていた母であった。その母を「いかにもしてたすけ」**A**「と考えるのだが、良い方法がない」という内容である。このことから**A**には「助きたい」という意となる願望表現を入れるのが最適であることが推察できる。

文法

いかにも……願望や意志の語

訳 どうにか・ぜひとも

したがって、正解は①。

③「助けた。助けていた」や⑤「助けないだろう。助けたくない」はいずれも×。

集問2 古語の意味

③「広間」を「ヨモ」と読むことはできないので×。残りのうち、①「世面」と②「余模」は日本語には見当たらない語なので×。ただ、①「世面」は「世間」の意として、現代中国語に存在する語ではある。⑤「代母」は日本語として存在する語。しかし、「ヨモ」ではなく「ダイボ」と読むので×。した

問5 解釈

傍線部中の「とりざた」は「処置」や「世間の噂」という意を表す。④「うらやまれた」は「処置」や「噂」の意から離れている上に、価値判断にまで踏み込んでいて、それが妥当かどうかの判断ができる根拠もないので、不適切。したがって、④は×。

残りの選択肢については、どのよう**な**「とりざた」があったのかということを確認しなければならない。母を殺してその首を供養した侍を主君は「孝行の至極」と認め、さらに傍線部直前から世間の人々が「忠孝兼備の士」とその行為を認めていることがわかる。「忠孝兼備」とは「主君への忠義心と親への孝行心を兼ね備えている」ということ。このことから世間の人々は侍の行為を高く評価していることが理解できる。①「議論的になった」、③「批判を浴びた」、⑤「ありもしない噂を呼んだ」は、その解釈にそぐわないので、いずれも×。正解は②。

問6 解釈

「**いかに及びがたし**」の形で、「**いかに及ぶがかなわな**し」の意を表す。その意味から考えると、②「言葉にするまでもない」、④「一言で決めつけるのはおかしい」、⑤「良いか悪いが、すぐには判断できない」はいずれも不適切な解釈なので×。

①「言葉では表現できない」と③「言葉で言い表せない」はいずれも適切だが、その続きはそれぞれ①「すばらしいことだ」、③「悪いことだ」と正反対の解釈が記されている。どちらが作者の見解としてよいかは傍線部以降の内容から判断する必要がある。その中で作者は侍の行いについて、「情けなく親を切りて…恥を覆はんとはかる。その罪悪、五刑に処してもあきたるべからず」(20～21行目)として、「かかる大罪人を…」(24行目)と、この侍を「大罪人」と認めている。つまり、③「悪いことだ」と判断しているのである。したがって、正解は③。

がって、正解は④「四方」。

「**四方**」は「**東西南北**」や「**あたり**」**一帯**」という意味であるが、ここでは「**天下**」「**諸国**」などの意である。

問3 現代語訳

次の二点の訳に注目してみると、選択肢は絞れる。

1. 「**手**にかく」は「**人を殺す**」という意。

「かく」は「かける」「兼ねる」「比べる」「預ける」など、とても多くの意味を表す語なので、前後の文脈から判断する力が必要である。

2. 「**跡**を**と**ぐら**ふ**」は「**人が亡くなった跡の供養をする**。冥福を祈る」の意。

ここでの「とぐらふ」は「弔ふ」の字を当てて解釈するのがよいが、「訪ふ」の字を当てて「尋ねる」「訪問する」などの意も表す重要な単語である。なお、「とぐらはん」の「た」は意志の助動詞「む」の終止形。

この二点の訳より、①は「持ち去って」が×。②は「再びここを訪れよう」が×。③は「葬送することにより」と「恥を隠そう」の二カ所が×。④は「手を取って」が×。したがって、正解は⑤となる。

また、これとは別に、傍線部直前の「他手にかけて…より」という比較の表現に気がつけば、「我が手にかけて」の格助詞「が」は主格ではなく連体修飾格すなわち「私の手にかけて」と訳すべきものであることがわかり、そのように訳をしているのは⑤以外にはないということからも正解にたどり着くことができる。

集問4 古語の読み

「**至極**」は「**シクク**」と読む。選択肢のそれぞれの語の読み方は以下のとおり。①「極力」は「キョクリョク」、②「極端」は「キョクタン」、③「極致」は「キョクチ」、④「極刑」は「キョツケイ」、⑤「極意」は「ゴクイ」。したがって、正解は⑤。

問7 現代語訳

品詞分解から直訳を試みる。

品詞分解

サ変死<sup>上</sup>未<sup>下</sup> 打消<sup>上</sup>ず<sup>下</sup> 体<sup>上</sup> 係助<sup>上</sup>反語<sup>下</sup>  
死<sup>上</sup>せ<sup>下</sup> ざる<sup>上</sup> や<sup>下</sup>  
訳 死なないのか。いや、死ぬ。

これに近い訳は④であり、これが正解。

①「あるいは死なない方がよかったのだろうか」、③「死ぬべきではなかったのだ」は事実と異なるので×。また、②「わからない」、⑤「疑問だ」といった判断を保留した表現も不適切なので×。

問8 空所補充

空欄Bの直前「禽にだにも」とある。

文法

副助詞「だに」⇨あるものを提示し、他のものを類推させる働き。

訳 くだに……打消の表現  
訳 くださえも……ない

これを踏まえて、空欄Bを含む白楽天の詩を読むと、呉起が母の喪に臨席しなかったことを非難し、そして「その心」つまり呉起の心は「禽にだにも」つまり鳥の心にさえもおよばないことを類推させていることがわかる。そのような意味となるのは①「しかず」で、これが正解。「**しかず**」は「**いかに及ばない**」の意。

②「おはず」は「負はず」「追はず」「覆はず」など複数の語が想定できるが、どれも内容にそぐわないので×。③「ならず」も「成らず」「生らず」などの語が想定できるが、やはり内容にそぐわないので×。④「いはず」、⑤「やまず」

も文脈上不適切なので×。

問9 現代語訳

「かぬ」は動詞の連用形に付いて「〜するじやがひきなく」「〜するいじやがたえられない」などの意を表すナ行下二段活用の接尾語「かぬ」の未然形。「まじき」は打消推量の助動詞「まじ」の連体形。「切らないとはいえないだろう」「切るかもしれない」ことを意味している。

①と④は「切る可能性はない」といつているので×。残りの三つはどれも「切る可能性がある」ことを述べているが、③「切るとは限らない」は「ほぼ切るが切らないかもしれない」という意味になり、文脈上不適切なので×。

②と⑤では少し迷うが、⑤「切るに違いない」は確実に切るだろうという認識をもたらす表現であり、「〜かぬまじき」の表現がそこまで確かな未来を推量している表現だとは言いがたいことを考えると、②が最適である。

問10 文章全体の理解

選択肢を一つずつ検討していく。

① 世間の俗説では、この武士が母の首を奪い、ひそかに葬ったことを、母の恥を隠す孝行であったと評価している。しかし、作者の意見では、親の名誉がない。(×) や恥を気にするのは孝行の道から外れるので、この武士の行為は孝行とはいえない。

② 世間の俗説では、この武士が母の恥を隠した孝行こそ、何よりも評価されるべきであるとしている。しかし、作者の意見では、孝行も重要だが、何か事件が起きた時に主君を守ることこそが、武士にとっては最も重要な

のである。

③ 世間の俗説では、この武士が母を殺害してでもその恥を隠した孝行を評価するあまり、忠義をも兼ね備えていると評価している。しかし、作者の意見では、母への孝行は認められるとしても、主君への忠義は認められない。

④ 世間の俗説では、この武士は母を殺したけれども、その恥を隠したのだから孝行であったと評価している。しかし、作者の意見では、母を殺すなどということは絶対にしてはならないのであり、この武士を賞賛するのは誤りである。

⑤ 世間の俗説では、この武士は母の命を助けることには失敗したが、本文には「ひそかに葬り」とあるだけで、それ以上具体的な弔いの様子は記されておらず、「手腕」という表現は不適切。(×) その死後を弔った手腕がすばらしかったと評価している。しかし、作者の意見では、母の命を助けるために自分の命を捨てることこそが、何よりも明するが、本文ではそれほどには強調されていない。(×) 尊い行為なのである。

よって、正解は④。

選択肢判定チェック

選択肢判定チェック

●作品(作者)解説

『広益俗説弁』は享保二二七一年刊行の随筆をもとに増補していった作品。まず伝説や俗説を挙げて、それに対して和漢の書物に載る話を参照しつつ批判検討する形式で記された随筆である。啓蒙的著作であるが、批判的、合理主義的態度で記されている点に特徴がある。

作者の井沢蟠龍は江戸時代の神道家。垂加神道を究めたが、やがて神道の域を脱して、古典をはじめ広く和漢の書籍に通じるに至る。武芸にも堪能であった。『広益俗説弁』以外にも『本朝俚諺』など数多くの著書がある。

(参考：『日本古典文学大辞典』)

●参考

『広益俗説弁』の中に引用されている和漢の書籍は六百以上あるが、そのことは享保の時代にはそれだけの作品を人々が目にしようと思えばすでに可能だったということを示している。当時の出版状況や人々の知的興味また関心はかなりの高かったということが推測できる。

品詞分解

俗説に云はく、中ごろ、ある士、浪々の身となりて、本国に老母ばかりを残し置き、他国にいたり奉公しければ、母を迎へむがため、本国に帰るに、道のかたはらに、盗人なりとて、木にしばりつけて面をさらすものあり。立ちよりて見れば、おのが母なり。かの士、いかにもしてたすけばやと思案をめぐらせども、せんかたなし。この上は、他手にかけて盗人の名を四方にあらはさんより、我が手にかけて跡をとぶらはんと思ひ、刀をぬいて、あたりに付き居たる番人どもをきりはらひ、母が首を取りて逃げ去りたり。追ひ散らされたる番人ども、もとのところにかへりて盗人を見るに、首無ければ、体ばかりを刑におこなふといへども、首無くして、誰といふことをしらす。

かの士は、母が首をひそかに葬り、主人が方に帰りて、あらましを相のべ、「子として母が首をきる、不孝の罪のがれがたし。かかる不孝の身をもつて、君につかふべき様なし。いとまをたまはらば、出家して母が後世をいのりたし」と申しければ、主君



聞きて、「汝が所為、孝行の至極なり。母を生けて恥をさらさせんよりは、首を切りて名をかくし、恥をおほふところざし、器量、世の常に拔群せり」と、大いに称美せられ、そのままにて仕官しぬ。そのころ、忠孝兼備の士と、とりざたしけるとかや。  
 今按ずるに、この士が所為、言語に及びがたし。その故は、昔、宋の徽州の鮑寿孫といふ者の父、賊のためにとらはる。賊、かれを樹にしばりつけて殺さんとする時、鮑寿孫、来たり拜して、父が死にかはらんことをねがふ。賊あはれみて、二人ながら命を助けたり。これをもつて思ふに、右の士も、母がからめられたるを見れば、すすんでその刑にかはりて死せざるや。親のためには、名をも恥をも命をもかへりみるべき事かは。然るを、情けなく親を切りて名を隠し、恥を覆はんとはかる。その罪悪、五刑に処してもあきたるべからず。もろこしにて、呉起が、己が母を葬る所に至り、よそに見て退きしをだに、白樂天は、烏の反哺に劣れりとて「昔、呉起といふ者有り。母没して喪に臨まず。嗟しいかな、この徒輩。その心、禽にだにもしかず」と賦せり。もし母を切りし者を見せば、梟鳥に等しとそしるべし。かかる大罪人を、孝子とほめて使へるも不思議なり。変にのぞみ難に及ぶ時は、必ず主君の首をも切りかねまじきくせものなり。おそるべし、にくむべし。

現代語訳

世間で言い伝えられている説に言うことには、そう遠くない昔、ある侍が、(奉公先のない)浪人の身となつて、故郷の国に年老いた母だけを残し置いて、他の国に行き奉公をしたところ、(生計の見通しが立ち)母を呼び寄せるために、故郷の国に帰ると、(その途中)道の傍らに、盗人であるといつて、木に縛りつけて人々の目に触れるように顔をさらしている者がいる。(近くに)立ち寄つてみると、(縛りつけられている者は)自分の母である。先の侍は、何としても助けたいといろいろと考えるけれども、どうにも助ける方法がない。そのうであるからには、他の人に殺されて盗人の名を天下に広く知らせるより、自分の手で殺して(母が死んだ)跡を弔おうと思ひ、刀を抜いて、近くに付いていた(見張りの)番人たちを切つて追ひ払い、母の首を(切り)取つて逃げ去つてしまった。追ひ散らされた番人たちは、もとの所に戻り盗人を見ると、首がないので、胴体ばかりの死体を刑に処するというけれども、首がないために、誰とすることもわからない。

あの侍は、母の首をひそかに埋葬し、主人の所に帰つて、おおよその事情を確かに述べ、「子という身で母の首を切る。不孝の罪を逃れることは難しい。このような不孝の(罪を負つた)身で、主君に仕えることができるわけではない。職を辞すご命令をいただくならば、出家して母の来世の安樂を祈りたい」と申し上げたところ、主君は聞いて、「お前の行為は、親孝行の極みである。母を生かして恥をさらさせるよりは、首を切つて名を知られないようにし、(母の)恥を覆ひ隠す愛情、才覚は、普通よりも飛びぬけて優れている」と、たいそう褒め称えなさり、(その侍は)そのまま仕官をした。その折、(その侍のことを)主君への忠義と親への孝行を兼ね備えた(優れた)侍であると、(世間では)評判

であつたとかいうことである。

今あれこれと考えると、この侍の行為は、言葉では言い表せないほど悪いことである。その理由は、昔、宋の徽州の鮑寿孫という者の父が、賊によつて捕らえられた。賊が、彼を樹に縛りつけて殺そうとする時、鮑寿孫が、来て拜礼し、父の死に代わること(父の代わりに自分が死ぬこと)を願う。賊は(父を思う情愛に)しみじみと感じて、二人とも命を助けた。この話と対照して思うと、先に記した侍も、母がからめとられた姿を見るならば、どうして(自ら)進んでその(母の)刑に代わつて死なないのか。(いや、進んで死のうとすべきだった。)親のためには、名誉も恥をも顧みなければならぬことだろうか。(いや、顧みる必要はない。)それなのに、薄情にも親を切つて名を隠し、恥を覆ひ隠そうと企てる。その罪悪は、五刑に処しても十分満足できるものではない。中国で、呉起が、自分の母を埋葬する所に着いて、顧みることなく放つて、立ち退いたことでさえ、白樂天は、(呉起の行為を)烏の反哺にも劣つていたと思つて、「昔、呉起という者がいた。母が亡くなつて喪にも臨席しなかつた。哀しいことであるよ、このような仲間。その心は、鳥にさえも及ばない」と詩を作つた。もし母を切つた者を(白樂天に)見せるならば、(注)梟と同じであると非難するに違ひない。このような大罪人を、親孝行な子であると褒めて用いることも不思議である。事変に遭遇し困難な事態に立ち至る時は、必ず主君の首をも切らなはいとはいえないような怪しげな者である。用心しなければならぬ。とがめなければならぬ。

(注)中国では梟の雛が母鳥を食べるといふ言い伝えがあり、梟は「親不孝者」の象徴とみなされることがあつた。